

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

BEL CICLISMO!

* 素晴らしき自転車レース④ *

谷口 和久

●自分に合った自転車を求めて

「きっちり足に合った靴さえあれば、じぶんはどこまでも歩いていけるはずだ。そう心のどこかで思いつけ、完璧な靴に出会わなかった不幸をかこちながら、私はこれまで生きてきたような気がする。行きたいところ、行くべきところぜんぶにじぶんが行っていないのは、あるいは行くのをあきらめたのは、すべて、じぶんの足にぴったりな靴をもたなかったせいなのだ、と。」(「須賀敦子著『ユルスナールの靴』河出文庫」より)

須賀敦子さんがここに書かれた「きっちり足に合った靴」というのは、言うまでもなく比喻であり、自らの人生を歩んでいくのに必要な有形無形の諸々の事柄—仕事、家庭、思想等々—を指している。こうした比喻によって、必ずしも天気晴朗・順風満帆とは言い難かったご自身の半生を振り返っておられるのだろう。

須賀さんほどの振り返るべき人生を持たない筆者としては「たしかにきっちり足に合った靴って、いまだかつて出会ったためしがないなあ」といった短絡的感想を持つのみであるのだが。ただ、「どこまでも歩いていける」というフレーズはとても魅力的だ。たとえ速くなくてもいい。時には迷ってもいい。風の吹くまま気の向くまま、体力・気力の続く限り「どこまでも歩いていけ」たら・・・

「きっちり足に合った靴」というのは、ポジティブな側面と、ネガティブな要素を持たないという側面と、両方の意味合いを持つのではなかろうか。ど

ういうことかという、前者はそれを履くことで足が弾むように動くということであり、後者は当然ながら靴擦れなどおこさない文字通りサイズがきっちり合っている靴ということだ。

自転車にも、同じことが当てはまるだろう。弾けるように足が回る自転車、長時間乗っても肩や腰が痛くなることのない自転車。「きっちり体に合った自転車さえあれば、じぶんはどこまでも走っていけるはずだ」。はたして真実は？？！それを探る旅に出よう。



【オリジナルフレームの並ぶイタリアの自転車工房】

●ス・ミズーラの自転車工房

2009年8月。その夏、自らの自転車を持ってイタリア・ヴェローナを訪れる計画があったので、事前にグーグルで現地の情報を調べていた。かつては「旅の前には『地球の歩き方』」だったが、今では完全に「旅の前には『グーグル』」だ。まあ、旅に限らず、なんでもそうだが。イタリアに限らず、

国内であっても、自転車で遠出をするときには事前に旅先の自転車店を調べるのが習慣になっている。もちろんパンクや故障といったトラブルに遭った時の万が一のためということもあるが、行く先々でどんな自転車が並べられているか眺めることも楽しみの一つなのだ。



【駅前通りに面したズッロ工房】

“verona bici”とか“verona cicli”といったキーワードでヒットしたのが、ヴェローナ市街から真西に行くこと約15キロの場所に位置するカステルヌオーヴォ・デル・ガルダ“Castelnuovo del Garda”という町にあるズッロ“Zullo”という自転車店のサイトであった。まずは(失礼ながら)イタリアのサイトにしては、すっきりしてわかりやすい構成に惹かれた。ページをたどっていくと、サイズオーダー“su misura”にも対応しているという。そう、ここは単に既製品の自転車を並べて販売しているだけではなく、自らフレーム製作もおこなっているのだ。筆者の周りでは「イタリアでコートを作った」とか「靴を誂えた」という話は聞いたことがあったが、自転車をイタリアで作ったというのは寡聞にして聞いたことがなかった。本や雑誌では読んだことがあったが、「なんかややこしそうだ」というのが正直な印象であった。特に通関というものが、よくはわからないが、よくわからないだけに鬱陶しい。

面倒な書類を提出させられたり、余計な金(=税金)を払わされたり。そういった事柄を(勝手に)頭の中で並べるだけで、「なら、いらん」ということになる。もっとも、日本で販売されている輸入品にはすべて関税がかかった上で、さらに代理店や販売店のマージンも乗っかっているのだから、個人輸入によってマージン分が省かれるので明らかにお得なのだが、人間不思議なもので、自分で直接払うとなると「余計な出費」と感じられるのは何故だろう。いずれにせよ、サイズオーダーそのものはかなり魅力的ではあるのだが、それにまつわる諸々の手続きでこの足を踏んでしまうのが実際のところだ。しかしながら、このズッロのサイトを見ていたら、問い合わせ対応言語の中に、なんと日本語があるではないか。しかも工房スタッフの名前に、日本人の方のお名前がある。これなら手続きでややこしいことがあっても、日本語で相談ができるのではないかと。そう思い、とりあえず日本語と(簡単な)イタリア語で「買うかどうかは現時点では決めていないが、サイズオーダーに興味があるので、貴店で自転車を見せてもらったうえで、採寸をお願いしたい」という趣旨のメールを送った。すると日を置かず、工房の日本人スタッフ安田氏から、ちょうど私の来訪時にはご自身は日本に一時帰国しているが、工房はぎりぎりヴァカンス前で開けているので、親方ティツィアーノ・ズッロ氏が直接対応します、との返事が来た。と、ここまでが渡航前の話。



【ティツィアーノ・ズッロ氏】

● やってきましたズッロ工房

さて、イタリアに渡ってヴェローナ滞在中に工房を訪問した時のこと。初対面のズッロ氏はイタリア

人としては比較的物静かで、顔だちも含めて近頃ちょっと話題のサッカー日本代表新監督ザッケローニ氏に似た印象(もちろん、その頃はザッケローニ監督のことは知らなかったが)。さっそく訪問の趣旨を伝えると、安田氏から聞いているよ、ということでころよく招き入れてくれた。ちょうど真夏の昼下がりのこと、すでにその日100キロほど走り回って汗みどろになってやってきた筆者のために、冷蔵庫からミネラル・ウォーターの大きなボトルを差し出してくれた。冷たい水でのどをうるおしながら、商品ラインナップや製作現場を案内してもらう。店内はもちろんのこと、作業場や収納スペースもきっちり整然としていて、「ここなら安心して発注できるだろう」という印象を持った。



【整然とした印象のズッコ工房】

さて、採寸にとりかかる。身長から始まって、股下・ひざ下・腕などを専用器具で測定。一瞬のすきに太ももの皮(=皮下脂肪)をつままれ、“meno male(まずまずだね)”とボソッと一言…。一通り採寸後はエスプレッソを飲みながら、デザイン、仕様、納期についてすり合わせ。そう、ここはサイズオーダーだけでなく、デザインもオーダーできるのだ。数十種類はあろうかというカラー・パターンの中から選ぶもよし。あるいは腕に覚えのある人であれば、自分でデザイン画を描いて発注することも可能だ。

仕様というのは「どのような目的で自転車に乗るのか」ということをヒアリングされる。レースなのか、サイクリングなのか。また、ひとことレースと言っても、平地のレースが主体なのか、アップダウンのある山岳コースが主体なのか、といったことだ。筆者の日ごろの走りは「山岳コースをマイペースで」ということが多く、大会に参加と言っても、

ここ数年は「グラン・フوند “Gran Fondo”」と呼ばれる、イタリア語で「大いなる持久力」といった意味の長距離山岳サイクリング大会ぐらいで、本格的なロードレースに出ることはない。グラン・フوندと銘打った大会は、日本では一般的に順位をつけることはなく、各人自分のペースで、速く走りたい人はレース・モードで、ゆっくり走りたい人はサイクリング・モードで参加できる、非常に懐の深いイベントである。これが本場イタリアとなると、現役のプロ、OB 選手、トップアマが入り乱れて着順を競うものとなる。もちろん、イタリアでもマイペース・ライダーは大勢いるけど。筆者は当然、後者なので「グラン・フوندが好みなので、楽に長距離のアップダウンをこなせる自転車がほしい」というオーダーをした。体格に合わせることは当然のこと、こういった乗り手の目的に応じて、フレームのサイズや各パイプの組み合わせ角度などを自在にアレンジしてもらえるのが、オーダーフレームの大いなるメリットである。その際、ズッコ氏のような熟練のフレーム・ビルダーであれば、長年の経験から、乗り手の体格、乗車スタイル・目的など様々な要素を勘案して、絶妙のセッティングをしてもらえる、すなわち「きっちり足に合った靴(自転車)」を手にすることができるわけだ。

納期については、「いつまでに欲しい?」と聞かれたが、特に大会に出る予定があるでもなく、とはいえ「いつでもよい」と言うと、かなり後回しにされる可能性もあろうかと思ったので「年内には欲しい」と言うと、「いま、オーダーがかなり多いから年明け1月ごろでもいいかい?」と聞かれたので、二つ返事で OK した。結果的には、その後ズッコ氏が心発作で倒れたり、アイスランドの噴火で航空便が足止めを食ったりで、日本に到着したのは年明けの5月であったが。

(この項続く)

※筆者注: 2010年9月現在、ズッコ工房の日本人スタッフ安田氏は、すでに日本に本帰国されていますが、日本経由で取次業務は継続される予定です。最新情報は下記サイトでご確認ください。

・ズッコ工房 <http://www.zullo-bike.com/>

・安田氏のサイト <http://www.kinopio.com/>

(当館スタッフ)

VIVA IL CINEMA ITALIANO !

第23回『ボローニャの夕暮れ』

Il papà di Giovanna

松島 征

今回は、第二次世界大戦下のボローニャを舞台にしたプーピ・アヴァーティ Pupi Avati 監督作品『ボローニャの夕暮れ』*Il papà di Giovanna* (2008)を取り上げます。今は亡き井上ひさしがあらゆる世界中の都市の中で最も愛していた街ボローニャ。そしてわたし自身も、ヴェネツィア、フィレンツェに負けないほど好きな街ボローニャ。パゾリーニを、そしてウンベルト・エーコを生んだ、大学都市ボローニャ。この街を舞台にして、若い娘ジョヴァンナの一家を見舞う悲劇の展開を、大戦の初期から十数年にわたって丹念に描いたのが『ボローニャの夕暮れ』(原題は『ジョヴァンナのパパ』)という作品です。セピア色の画面が織りなすノスタルジー。とりわけ、4名の主演俳優の演技がすばらしい。ジョヴァンナの父親ミケーレを演じたシルヴィオ・オルランド(本来は喜劇役者らしいが、この作品では娘を溺愛する父親の悲劇を演じている)は、この役の演技によりヴェネツィア国際映画祭の主演男優賞を受賞しました。その娘で、心神喪失の状態でクラスメートを殺してしまうジョヴァンナを演じたアルバ・ロルヴァケルは、イタリア・アカデミー賞に相当するダヴィッド・デイ・ドナテッロ賞の最優秀主演女優賞を受賞。ジョヴァンナの母親デリアを演じたフランチェスカ・ネーリの抑制の利いた演技もすばらしい。ミケーレの友人で、デリアが密かに思いを寄せている警察官セルジョを演じるエツィオ・グレッツジョの演技も文句なしにうまい(イタリア・ゴールデングローブ賞の特別賞)。

わたしのこの映画作品に対する印象は、「俳優の演技力がやたらに目立つ作品であるな」というものでした。ストーリーの展開そのものは、なんとなくリアリティに欠けており、御都合主義ではあるまいか、というのが映画を見終わってからのわたしの正直な印象です。これについてはあとでくわしい説明をすることにして、まず「ボローニャがど

んなに素晴らしい街であるか」という点について、井上ひさしのボローニャに対する熱い思い入れを語ったエッセー『ボローニャ紀行』に依拠しながら話を進めましょう。



「ボローニャの夕暮れ *Il papà di Giovanna*」

ボローニャの街でまず目に飛び込んでくるのは、ポルティコ(柱廊)です。現在、ポルティコの総延長距離は42キロに及び、街のほとんどすべての通りをカバーしています。たとえ雨が降ってきても、広場や交差点以外では傘が要らない、ということです。おまけにポルティコで保護された歩道は、車道よりも一段と高い場所にあり、自転車も通行禁止なので安心して歩けるのです。日本の都市の街路は、歩道さえついていない所が多い。「自動車は学童の列に突入」という事件が年に数回発生していますが、車道よりも高い位置に歩道が完備されていれば、このようなむごい事故の起きるはずがありません。わが国では歩道があるところでも、その歩道の上を自転車がわがもの顔に走り回っていて、子供や老人は安心して歩くこともできません。総じて日本の道路行政は車優先であって、歩行者の安全は二の次、三の次のように思われるのです。

閑話休題。ポルティコ(柱廊)誕生の由来については、おもしろい話があります。ボローニャは、ヨーロッパで最初に大学が誕生した街です(1088年と云われる)。ボローニャの位置は二大街道が交差していて、物資の流通・集散が盛んであるということから、商業に関する法律の研究が盛んになり、いつのまにかローマ法(都会人と商売人のための法律)研究の一大中心地になりました。パリ大学が神学の研究を中心とする、いわゆる「虚学」のセンターであったのに対して、ボローニャ大学は「実学」のセンターとして誕生したというわけです。しかもその形態は、学生組合が中心となって、学者たちを招いて講義をさせるという、学生を

主体としたものでした。

ヨーロッパの各地から学生が集まってくるにつれ、住宅難という事態が生じてきました。そこでポローニャの人々は、この住宅難を解消するために、歩道の上に部屋を建て増しするようになりました。最初は、木の柱で部屋を支えていたのですが、安全性に問題があるということで、それらの柱は次第に石に置き換えられるようになったのです。



「ポローニャのポルティコ(柱廊)」

この街は「赤いポローニャ」と呼ばれ、戦後一貫して革新派の市民が政治のイニシアティブを取ってきました。そのために、キリスト教民主党が支配するローマの中央政権から露骨ないじめに逢わされたのです。しかし、ポローニャの市民たちはそれに負けなかった。数々の精密機械を製造し、その販路を外国に拡大することにより、ローマ政権を見返したのです。読者のみなさんは、日本茶のティーバッグ包装システムがポローニャで開発されたということをご存じでしたか？『ポローニャ紀行』の「街の動力」という章でそのことが紹介されるまで、わたしはうかつにも「これを考案したのは日本人である」と勝手に思い込んでおりました。伊藤園の注文を受けてポローニャの IMA 社が、日本茶の自動ティーバッグ包装システムを開発したのが事実だそうです。

井上ひさしさんによれば、政治・経済・産業・学問・文化・芸術などのすべての分野において「ポローニャ方式」なるものが存在するのだそうです。その基本的な精神は、① 困難にぶつかったら過去に学ぶ、② 古いものを壊さずに、その中身を現在のために使う、③ 中央政府の権威をおそれず、みんなで力を合わせて生きる、④「社会的協同組合」を有効に利用する、などの点にあるようです。いずれの精神も、われわれ日本人には真

似をすることがむずかしいような気がするのは、わたしだけの感想でしょうか…。

哲学者・作家のウンベルト・エーコが中心になって、ポローニャ大学が芸術音楽演劇学部を開設し、ローマからダリオ・フォー夫妻を招聘して、ポローニャを演劇都市にしようとして成功したのも、その一例です。ちなみにダリオ・フォーは、この功績により 1997 年にノーベル文学賞を受けました。

いささか脱線が過ぎたようです。ここで『ポローニャの夕暮れ』のストーリーを簡単に要約しておきましょう。

1) 映画の最初の舞台は、1938 年のポローニャ。高校の教師ミケーレは、内向的な娘のジョヴァンナにボーイフレンドができないことに悩んでいる。ある卑劣な策を弄して、人気者の男子生徒を娘に近づけることに成功する。

2) ジョヴァンナは、親友のマルチェッラの誕生パーティーに招かれ、晴れ着を新調してでかけるが、泥酔して昏倒。娘を迎えに行ったミケーレは、ジョヴァンナとマルチェッラの間になんらかの葛藤があったらしいと知らされる。

3) その数日後、ミケーレ夫妻は、友人の警察官セルジョに誘われ映画見物にでかける。帰宅してみると、娘は自分の部屋に鍵をかけて閉じこもっている。ジョヴァンナのタオルに血がついているのを見て、ミケーレはいやな胸騒ぎがする。

4) その翌日、学校に行ってみるとマルチェッラの姿がない。彼女は体育館の倉庫に遺体で横たわっていた。目撃者の証言から、マルチェッラを殺したのはジョヴァンナであることが判明する。

5) ジョヴァンナは裁判にかけられるが、彼女が未成年であることに加え、精神科医の証言により、犯行時には心神喪失状態であったという理由で無罪になる。怒り狂うマルチェッラの母親。

6) ジョヴァンナはレッジョ・エミーリアの精神病棟に監禁状態にされる。ミケーレは教師の職を追われ、ジョヴァンナのもとに足しげく通う。母親のデリリアは気持ちの整理がつかず、ジョヴァンナに会いに行こうとはしない。それでも「母の黒い手袋がほしい」という娘の願いを叶えてやる。黒い手袋を受け取ったジョヴァンナは、まるで幼児のように飛び上がって喜びをあらわす。

7) 連合軍による空襲が激しくなり、セルジョの家

族が避難していた防空壕に爆弾が落ちて、セルジョは二人の家族を失う。

8) 妻のデリアがセルジョを慕っていることにうすうすと勤づいていたミケーレは、妻をセルジョに譲って、自分は娘が入院している精神病棟のあるレッジョ・エミーリアの一軒家に移り住む。ポローニャ生え抜きの画家モランディ(ミケーレの古い友人という設定)に手紙を書くが、当然返事は来ない。

9) 1945年4月、長かった戦争がついに終わり、ポローニャではファシスト狩りがおこなわれる。ムッソリーニを支持していたセルジョは、数人の仲間とともに、デリアの眼前で銃殺される。銃弾を受けていながら、セルジョは必死の逃亡をして、最期は市街電車の中で息を引き取る。

10) 24歳になったジョヴァンナは、精神病院を出て社会復帰する。ミケーレは彼女をポローニャの自宅に連れ戻すが、そこには母デリアの姿はなかった。

これで映画は終わるのかと思っていたら、なんのことはない。さらにその7年後に、父と娘はポローニャの映画館でデリアに再会し、3人はもとのさやにおさまる、というなんともはや御都合主義的なハッピー・エンディング。これではアメリカ製のハーレクイン・ロマンスと変わらないのではないのでしょうか…。たとえば、以前コレンテ 201号で取り上げたフェッリーニの『アマルコルド』(1974)に見られるような、ファシズム体制の愚劣さに対するマンガチックなまでの痛烈な風刺がない。少年の父親が拷問に耐えながらやりぬいた「たった一人の反乱」のようなものが、『ポローニャの夕暮れ』にはまったく見られない。



「主演のシルヴィオ・オルランドとアルバ・ロルヴァケル」

そこにはまた、ヒトラーがローマにムッソリーニを訪問する歴史的な一日(1938年5月8日)を描いた名作『特別な一日』(エットレ・スコウラ監督、1977)に見られたような緊張感に満ちた映像がない(セピア色の色彩は、甘ったるいセンチメンタリズムでもってすべてを無害なものに変えてしまうのです)。主演の俳優たちはじつに達者ではあるが、ただ時代に流されるがままに生きているかのようなストーリー展開に、わたしはなんとなく違和感を抱いてしまいました。『特別な一日』の映像が、ファシズムの魔力にやすやすと取り込まれてしまう庶民の日常生活を描くことにより、「あなたもこのようにして簡単に加害者の側に立つのだよ」という批判をわれわれ観客に突きつけてくるのでは好対照の印象を受けたのでした。

[参考文献] 井上ひさし著『ポローニャ紀行』(文藝春秋、2008)

(京都大学名誉教授・フランス文学)

… 会館 だ よ り …

イタリア語 無料体験レッスン

10月より開講の秋期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 梅田:大阪駅前第4ビル

10/6(水) 19:00~20:30
10/10(日) 13:00~14:30
10/10(日) 15:00~16:30

● 四条烏丸:ウイングス京都

10/5(火) 19:00~20:30

● 京都本校:日本イタリア京都会館

10/5(火) 11:00~12:30
10/9(土) 11:00~12:30
10/9(土) 13:00~14:30

スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

日時:10/8(金) 16:00~17:30
会場:日本イタリア京都会館 本校
講師:当館スペイン語講師

ポルトガル語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

日時:10/4(月) 19:00~20:30
会場:日本イタリア京都会館 本校
講師:当館ポルトガル語講師

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/